



Title	アスペクト論素描
Author(s)	石原, 次郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(2), 177-195
Issue Date	1997-01-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33674
Type	bulletin (article)
File Information	45(2)_PL177-195.pdf



[Instructions for use](#)

アスペクト論素描

石原次郎

1. はじめに

意味とはなにか、という問いはすでに不当だ。この問いは、すでに意味というシニフィアンを、自立的で不変の実体として想定したいという願望に毒されている。この隠匿された願望を出発点とする意味理論はすでにはじめから、自分の似姿を追い求めて見つけ出すという循環論におちいる。

意味は言語に固有の問題でもない。「あの事件は、わたしにとってどんな意味があったのか？」この問いはもちろん、「事件」という語の意味を問うているわけではない。意味は、それを問う主体に強烈に関わる事柄であり、「そんなことして、なんの意味があるの?」、強烈にその主体の関心に結びついた事柄である。意味は、これらの問いが問うている当の事柄をなんとか理解せよ、というコマンドだと考えられる。問いを発した主体は、このコマンドを実行しようとして、それをディスクールに持ち込もうとするだけでなく、心理的な動態の操作までするだろう。このコマンドが仮りに終了したとしても、なにもそれは、事柄が別の言語に書き換えられえたわけではなく、むしろ主体がそれで「情緒的に」満足したせいだけかも知れない。

ある観点からすれば、意味生産とは、記号化のダイナミックスであると言えるかも知れない。それが生産行為であり、ダイナミックスであり、さらに主体が絡んでいるとすれば、意味生産とは立派な行為であり、しかも主体の欲望に結びついていると考えてさしつかえない。しかもこれは、記号化とはいえ、記号の変わり種とも思われる。コマンドとしての、「あの事件を理解せ

よ」「そんなこと（の結果）を理解せよ」は、「あの事件」、「そんなこと（の結果）」という、ぼんやりとしてはいてもそれなりの〈シニフィアン〉、つまり分節化され、区画されたなにものかを有している。ところがその〈シニフィエ〉は、求めるべき課題として不在のままなのだ。疑問：ソシュールが言うように、はたしてシニフィアンとシニフィエとは、同じメダルの裏表のように、分離が不可能なのか。習慣の集積物として抽象化された「言語」を観察したいのならそれでこと足りるかも知れない。せいぜい両者の結合が「かつては」恣意的だった、と言えはすみそうだ。ところがこれがいつも「恣意的」だとするとどうなるのか。意味というものが、わたしやあなたや、お望みならば「人間」とかいう永遠不変のオバケといっさい関係なく、自足的に存在しているはずもない。大気存在は、酸素交換を行わざるをえない生物にとつてだけのありがたさなのであって、大気はそもそも存在しているだけで、無意味だ。わたしが豚を食べ、猫を愛玩するのは、豚や猫がそう望んでいるからではない。意味は常に、それを求める主体との関係のなかで生産され制作され、捏造される。意味の生産とは、この関係性を取り結ぶ作業のことなのだ。しかもこの作業に、確立されたマニュアルはない。わたしは常に、わたしの関心に強烈に導かれて、関係する当の事柄を、わたしが知覚しているアナログの無意味な大海のなかから切り出し、それをわたしに結びつける。そうなると、切り出された事柄をことさらにシニフィアンと呼ぶ謂れもうすれてくる。

わたしはこの試論で、この切り出し作業をアспект生産と呼び、意味の生産の、正確に言えば意味の生産のひとつ前の段階の、シニフィエが不在のままのシニフィアンの、いや、まだシニフィアンとすら呼べないものの生産作業をモデル化して知覚（認知ではない）に関する新たな理論の略図を描き出してみたい。

2. シニフィアンの非決定性

すでにシニフィアンが絶えずシニフィエを探し求める動態を誘発する、と

いう事態を明確にするには、一般に文学と呼び慣わされるテキストの読みを観察してみるのがうってつけと思われる。

テキストの読まれ方は、決してテキストに書き込まれているようなものではなく、その使用法は社会的な慣習化によって経験的に獲得されるものだが、文学テキストは、他のテキスト、たとえば学術論文であるとか家電製品の使用説明書、事務的な連絡文書などに比べて、それを読む際の社会慣習的な拘束が極端に少ない。文学テキストを読むにあたって、それを「正しく」読むようしむけることは、美術館でどれが名画であり、それをどう見るかを教え込むのと同じほどに教条主義的で権力主義的だ。

テキストに正しい読みが存在するはずがないのは、なにも言語の特性によるだけではない。わたしは、ある小説なり詩を、わたしの読書のペースにしたがって、わたしの読みたいように読む。わたしの読書は、眠気や電話や訪問客やらによって中断されることがしばしばある。わたしは酒を飲んでいるかも知れないし、音楽を聞き流しているかも知れない。わたしは、ある小説のパッセージをただ漫然と、記憶にもほとんどとどめることなく、読み飛ばすかも知れないし、あるいは別のパッセージを、なめるように読むかも知れない。わたしは、パリについて、わたしが旅行で滞在した際の個人的な記憶と、メディアから入ってきた散漫な情報以外、なにも持っていないのに、パリが舞台になった小説をいい気で読んでいるかも知れない。わたしはあるテキストの修辭的な特徴にまったく気がつかないまま、それを読み続けるかも知れないし、逆に、あるテキストのなかに、誰も気がつかなかったような韻律を発見したと思ってほくそえむかも知れない。ある詩が、その詩の記号内容、つまりはとりあえず書かれていること、とはまったく関係のない、わたしの幼年時代の記憶を呼び覚ますこともある。

少なくとも文学テキストに関するかぎり、もっともこれは文学テキストに限ったことではないのだが、テキストの正確な読みという体験は、文学のフェティシストでもないかぎり、日常的には経験されることはない。この事態は、次の図1によって単純に示すことができる。

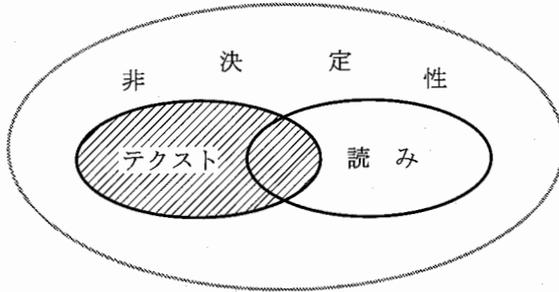


図1

斜線をほどこした楕円で示されたテキストは、文字情報として固定されたテキストの物理的な側面であり、これは読み手に左右されるものではない。しかし同時にまたテキストは、言語に特有の意味の非決定性に侵されている。語義は文に、文意は文脈に、文脈はテキストに、テキストはそのテキストをとりまく使用状況に、使用状況はさらに広い社会的なコンテキストにと、審級を変えながら依存していることを、今さらくどく述べる必要もあるまい。ある特定の読み手が、テキストをどのように使用し、どのように価値づけ、どのような社会的慣習を身につけているかは、特定できるものなどではない。この不特定性は、審級をどんどん下がって浸透し、たったひとつの語、あるいはさらにたったひとつの音、文字の形態にまで非決定性を巣くわせることになる。

いっぽう、テキストとはズレたところに楕円で示された読みは、読み手の恣意性に左右されるもので、読み手は、テキストの言語情報、テキストに書かれていることをすべて、しかもかなり正確にダウンロードするわけではない。そればかりか、とりわけ文学テキストの読みにあっては、読み手が読み際にしてどのような心的動態を経験しているかを制御することは不可能であるし、実際なにか起きているのかを知るすべもない。われわれがよく、正確な定義づけにしばしば深い絶望感を覚えながら、「文体」と呼び慣わしているものが、読み手に思わぬ、しかし言語化するにはあまりに非分節的で不明瞭

なインパクトを与えるかも知れない。加えて、同じ読み手であっても、テキストを再読する際に以前と同じ読みをするという保証もない。いや、必ず違った読みをすると考えたほうが無難だ。読みのスピードも関係してくるだろう。読み手がテキストにまつわる情報をどれだけ有しているかも大きな問題だ。読み手は作家のことをある程度知っていたのか、書評なり研究書などを読んでいたか、テキストを脚本化した映画を見たか、作家の顔写真を見たことがあるか、友人から感想を聞かされていたか、学校の授業に取り上げられていたか、それは読み手の恋人が好きなテキストか、などなどは、必ず読みに影響を与える。また、読み手がそれをどういう要求のもとで読むかも読みを大きく左右する。中学なり高校なりの授業で、受験対策の一環として読んでいるのか、大学で特殊な課題を与えられて読んでいるのか、研究者としてとてつもなく偏向した関心を、学界の正義と勘違いして読んでいるのか、地下鉄のなかで、通勤中の暇つぶしにうってつけのものとして読んでいるのか、手紙に引用するのに、なにか気の利いた文句を探しているのか、読んでいないと同僚や知人にバカにされかねないという教養主義的な強迫観念に追われて読んでいるのか、などなど、いくら挙げてもしりがない。読み手が誰かもまた、大きな動因だ。読み手は男か女か、何歳か、どんな教育を受けているか、どんな読書経験を持っているか、などなど。まだある。読者の心的状態。気分が滅入っているのか、高揚しているのか、坦々としているのか、……いくら挙げてもしりがない。

テキストの非決定性と、読みの非決定性とは、じつに複合的に絡みあっている。先ほど、テキストの物理的な側面は読み手によっては左右されないと述べたが、それはあくまで、たとえば本というモノが物理的に変成したり、活字の組みが勝手に変化したりということはまず考えられない、というだけのことで、じつはある本なり活字の集合がテキストと呼ばれるからには、すでに読み手、あるいは読み手という慣習行為を身につけた者がそれを読むか、あるいは読むためのものとして理解しているかしくはならない。当然、テキストをテキストとして同定するのは読み手であり、その段階ですでに、非決定性はテキストと読みの両方を巻き込むことになる。

わたしがここで是非とも言っておきたいのは次のことだ。ソシユールがパロールの分析を拒否したように、文学の研究者、あるいはさらに一般にテキストを研究対象にしている者は、こうした非決定性に徹底的に浸食された読みの現場に関してなにも発言しようとししないのだ。実際、読みの現場を押さえるのは絶望的だ。異常な情報収集能力、パラノーマルな他者理解力、完全無欠のウソ発見器、自分の欲動の完璧なエポケー、わたしはいつたい何世紀はやく生まれすぎたのだろう！それが事実上不可能だからといって、こうした現場を無視してよい理由には絶対にならない。理論には特有の決定癖、このよこしまな欲望が、テキストの読みに発動している非決定性を目の敵にしてきたのだ。

わたしはこの非決定性にこだわり続けて、非決定性そのものをなんとかシンプルなモデルに持ち込んでみたい。

3. シニフィアンからアスペクトへ

テキストの読みが非決定性に徹頭徹尾浸食されているなら、読み手がテキストのなかから任意の分節化をおこなって取り出してくる切片を、記号と呼ぶのには問題がありそうだ。記号というと、どうしてもシニフィアン／シニフィエの二重構造がイメージされる。すでに生産された意味と、その意味を生産させるに至った切片を問題にしているなら問題はない。素朴な因果性を発見する作業は、あまりにたやすい。ところが、意味がまさに生産されようとしている現場では、ことはそう簡単ではない。取り出されたある切片が、あらかじめ用意されたさまざまな意味のパレットから、そのひとつなりふたつなりを選択する作業に入るという保証も、じつはない。大抵のメタファー論が、間の抜けたコミュニケーション論に成り下がってしまうのは、このパレットからの意味選択という誤った仮説のせいだろう。さらに、切片に対してそれなりのシニフィエが与えられない可能性すらある。要するに、切片をどう加工し、変容させるかは、ひとえに読み手の欲求にかかっているわけだ。切片の切り出しにあたって、その切片をすでに記号、あるいはシニフィア

ンと名づけてしまうと、すでにその切片が意味の生産に乗り込むベクトルを想起させてしまう。実際には、この切片を切片のまま放置することも、読み手は可能だ。そこでわたしは、この切片を、アスペクト、つまり単なる見えと名づけようと思う。

わたしがアスペクトと呼ぶものがどんなものかを、簡単な例で示したい。

彼女の瞳は苔

20人ほどの学生が集まったクラスで、わたしはこの文を示して、好き勝手に処理をするようにと指示した。反応はわたしの期待以上にバラエティーに富むものだった。

こんな文章に関わる価値はない、と判断した学生が数名。その理由はふたつ。ひとつには、この文には意味がない、というもの。もうひとつは、この文に意味があったとしても、そんなものに頭を悩ますのは、結局これを書いた者の意地の悪い罠に引っかかるだけで無駄だ、というものだった。いっぽう、この文を明らかにメタファーとしてとらえたものが若干名。その解釈は実にさまざまなものだった。また、これをメタファーとは捉えず、リアルな描写としてとらえた学生が1名。「彼女の瞳は、本当に苔なんです。彼女が人間ではなく、人形、たとえば菊人形なら、ふしぎじゃありません。」もうひとり、実に興味深い意見。「わたしは、この、コ・ケっていう音が、もうそれだけでおかしくって。」

この例文に対する態度決定をまとめなおしてみよう。

これは文ではない、少なくとも有意の文ではない、という判断。

これは普通に解読できる有意の文だ、という判断。

これはメタファーの単なる形式的な模倣だ、という判断。

これは失敗したメタファー、つまりなにを言おうとしているのかが伝わらないメタファーだ、という判断。

これはメタファーであり、解読してみよう、という判断。

これは成功したメタファーであり、その意味はわたしには不明、という判断。

ある特定の語の音形態にだけ注目する判断。

もとよりこれは、想定できる反応の一覧表などではない。しかしこれだけですでに、読みの際になにをターゲットにするかがバラバラに分かれることは判るだろう。例文を、文は有意な伝達をおこなう、という厳格な意識によってとらえるのか、修辭的な文例としてとらえるのか、それとも文の音形態をとらえるのか、によって、読みとろうとするもの、つまりはその文の見え方が変わってくるわけだ。しかも、修辭的な文ととらえた場合でも、必ずしも読み手はこの〈メタファー〉の解説に向かうわけではない。解説を放棄することもあれば、解説が不能のメタファーとして楽しむ場合すら考えられる。特にこの、解説不能のままに受け入れて楽しむ、という心理動態と、音におかしみを感じる、という心理動態は、見えとしてのこの例文が必ずしもディコード、つまり他の言語記号連鎖への書き換えを特に意識してはいないことを示唆している。わたしがアспектと呼びたいのは、例文のこうした見えの側面だ。つまりこの例文は、見えとして、意味生産、狭義においては他の記号への転換を潜勢的に有しているだけで、それは必ずしも実行されなくても、読み手、あるいはもっと正確には見手はそれを受け入れることができるのだ。

メタファーに関する論議がこうしたメタファーのアспект的な特性を等閑視する理由は少なくともふたつ、わたしにははっきりしている。ひとつには、例示されるメタファーが、たとえば「彼女の瞳は1万ボルト」のように分かりやすく、したがってアспект性が意識されることもないまま、即座に安定した記号解説の作業に入ってしまうため。またもうひとつには、例が公式に認定された文学テキストから大量に引用されるために、これを解説、ならぬ解釈しようという、メタファーにあるアспект性とは違った集団的フェティシズムの圧力がかかってしまいやすいせいだ。

メタファーを離れた別の例で、わたしの言うアспектの特性がもっとはっきりお分かりいただけたらと思う。今度は任意の絵画を例にとろう。絵画は記号論的に「読まれる」、たしかにそういった側面も絵画にはあるだろう。しかしたとえばわたしがある1本の線の「動き」に魅いられたとき、画材の肌触りに魅せられたとき、ある色に強い印象を覚えたとき、こうした心的な

動態は、はたしてなにがしかの記号体系にディコードされているのか。こうした経験と、ほかの、お望みならば記号論的な情報が一体となって、わたしは今ある絵の前に立っているのではないか。記号論は、この経験の全体性をついにとらえられないままだろう。さらに、一般に芸術と呼ばれる対象物でなくとも、アスペクト性は明瞭に説明できる。たとえば、いま目の前に花が一輪あったとしよう。わたしはその花の色、形、大きさなどを、つねに、その花の名称をつきとめるために、つまり花に対する知的な情報を獲得する目的のみ、観察しているわけではない。わたしはその花がなんという名かをすでに知っているかも知れない。それでもなお、その花を見ているのは、その花を、正確にはその花のアスペクトを見ることが、わたしに独特の心理的な動態を与え続けているからかも知れない。

知覚から意味生産への作業工程は、したがってまずは次のように示せるだろう。

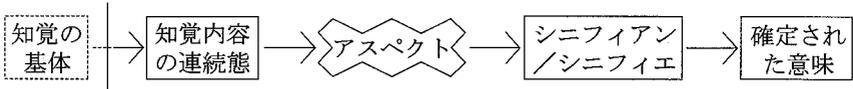


図 2

知覚の基体とわたしが呼ぶのは、ニーチェなら物体X、カントなら物自体と呼んだ、そもそも知覚を可能にしてくれるような、他者の存在である。(もちろんこれは単なる仮説だ。)そこから見手は、自らの知覚条件の制約を受けながら、区画のない知覚内容の連続態、つまりさきにわたしがアナログの無意味な大海と呼んだものを生産する。そこに見手がある区画、あるまとまりを見た場合、それは見手にある見え方を与える。この段階がアスペクトだ。そのアスペクトをなんらかの記号としてとらえ、意味解釈、ディコードの作業に入れば、そのアスペクトはシニフィアンとして、したがって同時にまたシニフィエとして処理される。その処理が完了すれば、アスペクトは意味として確定されることになる。この作業の流れをどこで止めるかは、見手の欲求

次第だ。たとえば日常的な言語のやりとりの場、一般に誤ってコミュニケーションと呼ばれている、なんらのディスコミュニケーション契機を含まないとされる情報交換の場（もっともそんな脳天気なシーンが日常的に遍在していれば、の話だが）では、アスペクト性はほとんど意識されずにいきなり意味処理の工程に入っていき印象があるだろう。しかし、じつはそういった場では、アスペクト性が単に無視されているだけのことなのだ。

4. アスペクト・モデル

前節では、比較的単位の小さい切片を単独にあつかってアスペクト性を説明したが、実際の知覚の現場では、複数のアスペクトが併存する場合が多い。テキストひとつを例にとっても、見手はたったひとつのアスペクトを見いだすわけではないだろう。それが何行かにわたる詩であれば、そこに見手は見ただけのアスペクトを見いだす。すると、アスペクトどうしが並列され、相互に干渉しあい、組み合わせられ、融合されていく過程もそこに想定されることになる。あるいはまた、ひとつのアスペクト A_p が、すでに意味処理のなされたひとつのシニフィアン／シニフィエ S_q と相互に結びつけられることも考えられる。この場合、 S_q は、ふたたび別のアスペクト A_r としてふるまっても一向にかまいはしない。つまり S_q があらためて A_p と組み合わせられることで、 S_q がふたたびそれを生産する母体となっていた A_q に差し戻されるか、あるいはまた S_q があらたに見手によって単なるアスペクト A_r と見なされるかも知れない。また、 A_p と S_q が融合してあらたに A_s を生み出すかも知れない。逆に A_p が A_r となり S_q と組み合わせられて、あらたに $A_t, A_u, A_v, A_w \dots$ と大量のアスペクトが生産されるかも知れない。

アスペクトの定義に際して、わたしが主張したいのは次の三点だ。

まず、アスペクトと呼ばれるものは、必ずしも意味生産にとりあえず関わりのない、知覚の切片に限定されないということ。見手が見る対象が、たとえばあるシニフィアン／シニフィエ、あるいはすでに確定済みの意味ですらあっても、それを記号内容として処理せず、ふたたび単なる見えとして処理

すれば、それはもうアスペクトなのだ。苔、という語の記号内容をひとまずしまい込んでおいて、コ・ケという音声のアスペクトだけを取り出すことはいつでも可能だ。言葉遊び、ダジャレのたぐいは、こうした経緯を劇的に示している。つまり、見手が見ている切片がどんなものであれ、ひとたび見手がその切片から記号なり意味の生産作業をしないという欲求を持てば、すでにその切片はアスペクト性を獲得することになる。

第二に、なにをアスペクトとするかは、したがって切片の特性とは一切関係がない。それはつねに見手の欲求によっている。

第三に、これはすでに述べたことからの帰結だが、わたしがさきに知覚から意味生産への流れ図(図2, 185頁)で示した各工程には、ほかのすべての工程からのフィードバックがかかっている。つまり、どの工程も非決定性にさらされており、したがって安定してはいない。これを安定させているのはこの工程自体ではなく、この工程を安定させよ、という外からのコマンドである。

以上の点を含めて、流れ図を修正してみよう。

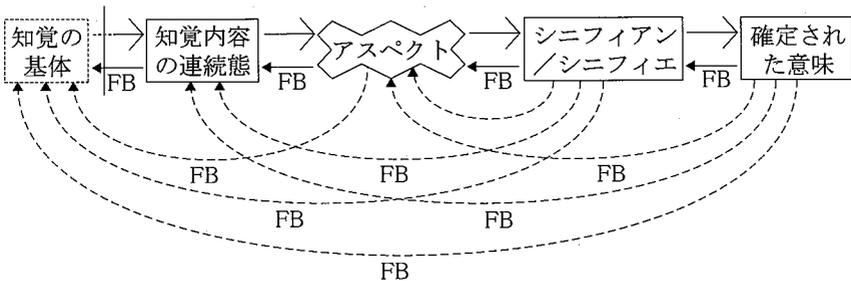


図3

この潜在的なフィードバックは、アスペクトがひとつだけの場合でも起きることは可能だが、むしろそれは、アスペクトどうしが併存し、相互に干渉しあうときに明らかに顕在化するだろう。そこで、以上の観点をまとめると、次の図4のモデルようになる。

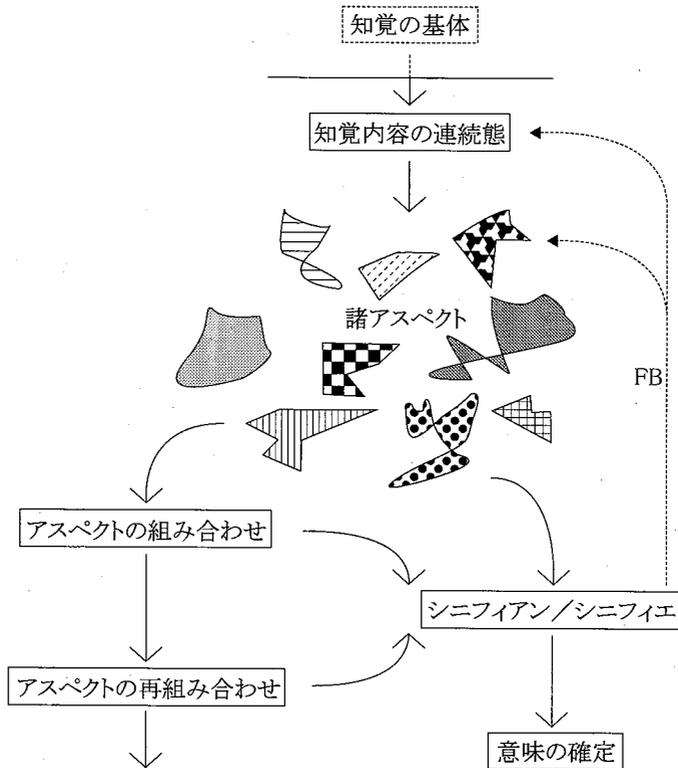


図 4

じつはフィードバックはこの図のすべての要素にかかっているのだが、煩雑なのでいちいち明記していない。繰り返すが、見手がどの工程にはいりこみ、どの段階で作業を中断するかは、あくまでも見手の裁量と欲求とによる。

これでわたしのアスペクト・モデルの概略は示した。あとは、このモデルの知覚および認識全般の理論に対する刷新性を示すだけだ。というのも、このアスペクト・モデルは、なるほどわたしの文学とのつき合いから生まれて来たものではあるが、それは文学に対する認識のみならず、知覚および認識の全般に当てはまるモデルだと考えられるからだ。

5. アスペクト・モデルと認識の理論

ここでわたしが試みてみたいのは、一般に知的認識と呼ばれている学術的な営みもまた、わたしが示したアスペクト性の有する非決定性と見手の欲求による工程の変化を免れるものではないということ、それにほとんど気づいていながらも、知的な認識の問題に囚われすぎたあまりに結局はアスペクト性を見逃してしまったと思われるヴィトゲンシュタインの、いや、正確にはヴァイスマンのディスクールをモデル化して示すことだ。理論の仮説性をめぐるヴィトゲンシュタインの議論はあまりにも有名なので、わたしはそれを、この試論に関わる点だけ、極めて簡略に描き出すにとどめておきたい。

F. ヴァイスマンの手になる『テーゼ』(WA 3)では、知覚対象の知的な構成をめぐる考察が、極めて図式的に現れている。それによると、知覚対象として切り出された事柄のアスペクトは数えきれず、複雑に絡み合っている(WA 3, 256)。これを知的な対象として概念化する、つまりはシニフィアン／シニフィエに持ちこんで、その意味を確定するには、帰納法が絡んでいると述べられる(WA 3, 255)。ヴィトゲンシュタインのさまざまな発言によると、人間は知覚する対象をその真実のすがたでとらえているわけではなく、その見え方、つまりはアスペクトをとらえているにすぎないということになるが、ここで非常に興味深いのは次のことだ。まず、ヴィトゲンシュタインは、知覚から意味生産への工程にアスペクト性が絡んでいることを明確に意識している。つぎに、その非決定性を、彼は再三にわたって、帰納法、仮説、ゲームなどの言葉で表そうとしている。第三に、それにもかかわらず、彼は学の、なかんづく数学だろうか、確実性にこだわったせいで、結局非決定性をなんとか制御する方向に流れてしまった。

さて、『テーゼ』に戻ると、対象の概念化には帰納法、つまり経験的なデータの集積によって仮定されたなんらかの法則性に関わっている。この法則性は仮定されたものであって、ヴァイスマンはこれは仮説というかたちをとって現れる、と述べている。これを図で示せば、図5のように簡略化できる。

このモデルでは、物体そのものは直接認知されるわけではなく、主体の知覚条件に限定されたその見え方、アスペクトが知覚されるだけだ。したがって、その知覚内容を物体の側から客観的に保証しているものはとてあえずなにもない。これを対象としてディコードすることを可能にしているのは、アスペクトの性格ではなく、アスペクトに適用される仮説のほうだ。つまり、アスペクトは仮説にしたがって取捨選択され、秩序づけられ、命題化されて概念、わたしが呼ぶところの意味に持ちこまれる。「対象とは、ある仮説にしたがって表現される、アスペクトのつながりである。」(WA 3, 256) で

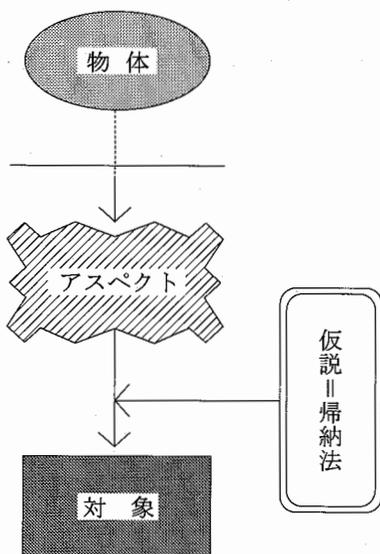


図 5

は、アスペクトに対して圧倒的な優意に立つこの仮説には、確実な根拠は、なにかそれなりの保証はあるのか。『テーゼ』に関するかぎり、仮説の名で呼ばれているのは、数学、物理学、それに論理学、また日常の言語使用などだが、ヴァイスマンはそれには確実な根拠がある、と言う代わりにこんな言いかたをしている。「対象はわれわれの期待に働きかける (wirken)。それでわれわれは対象を作用的／現実的 (wirklich) と呼ぶのである。なにも望まず、なにも恐れない者の手からは、世界はすべり落ちてしまう。世界は非作用的／非現実的 (unwirklich) になる。」(WA 3, 260) 対象を見よう、いや正確には見つけたさうという欲求がないかぎり、対象は現れもしないのだ。この欲求というものが、なにかとてつもなく単一で根源的で普遍妥当的だ、ということをおわたしに証明できるものすごい人がいたら、一刻も早く紹介していただきたい。欲求はその都度特殊なものだろう。そうなると、ヴァイスマンが例示しているような次のかたちを、どうとらえるか、は非常に興味深い展開を示すことになる。



ヴァイスマンはここに、楕円形の一部を見る、とニベもなく言っただけのける (WA 3, 256)。そう言えるのは、彼がこれを幾何学図形として見ようという仮説に、つまりコマンドに、したがってそういう欲求にしたがっているせいにはすぎない。そういう欲求を持っていなければ、わたしはただ単に、なんだかこの絵は汚ない、と思うだけかも知れないし、これはうちの天井のシミによく似ていると思うのかも知れないし、ヘタをすると、知り合いの顔にソックリだと思ふ者だっているかも知れないではないか。

そう、仮説は任意に設定できるのだ。その設定によって、アスペクトはどうとでも選択され、組み合わせられ、まとめ上げられることが可能なのだ。ここにもまた、欲求が絡んでくる。学もまた、ある欲求の上に築き上げられた、じつは任意の意味生産の手続きなのだ。この欲求が、あらかじめある仮説を設定し、それにしたがってアスペクトが組み合わせられるだけではなく、それ以前にアスペクトの生産を大きくコントロールする。学、あるいは理論と呼び慣わされるだけではなく、習慣化された一切の認識の作業工程は、こうしてアスペクト、つまりものの見え方にまで影響を与えるものなのだ。感覚がわれわれを裏切るのではない、われわれが感覚を裏切るのだ。図5は次ページの図6のように修正される。

わたしはここまで来て、不可知論におちいったのだろうか。そのとおりだ。確実な知、普遍妥当的な認識といったものは、わたしと、わたしの提案したアスペクト・モデルのなかには存在しない。確実と思われている知とは、そう集団的に慣習化されてきたにすぎないものなのであり、さらにタチの悪いことには、そのせいでものの見え方までもが制御されているのだ。そればかりではない。単に学的な知のこうした手続きに異論を唱えるだけなら、脱構

築でもなんでもやってきたことだろう。しかし、図6に示されたようなアスペクトに対する習慣的な仮説の侵略行為は、日常のありとあらゆるシーンで展開されているのだ。そうでなければもちろん、わたしはアスペクトの洪水のなかで溺れてしまい、通勤することすらおぼつかなくなってしまうだろう。そのとおり、この習慣化は、われわれの知覚を極めて経済的に

節約することに役立っている。しかしその反面、ほかの知覚の可能性を奪い去っていることもまた、確かなことなのだ。習慣化の結果、特定のアスペクトとその意味との結合があまりにも強化されて、ついにはその結合は必然的だという勘違いが起きると、対象を意味としてのみ見ようとする態度が、そしてついにはそれが知という権力をまとめて君臨するにいたってしまうのだ。

6. 終わりに

わたしは知のパラダイムを破産させるために、わざわざアスペクト・モデルを持ち出したのか。そうであるとも言える。しかし、このモデルの要点は、欲求という、客観主義に毒されている者なら主観的とでも呼んで毛嫌いしそうな、そうでなくても一般に学にたずさわる者からは、たとえば情動なり感情なりと呼ばれて、あまり歓迎されそうにもない要因を、知覚から意味生産

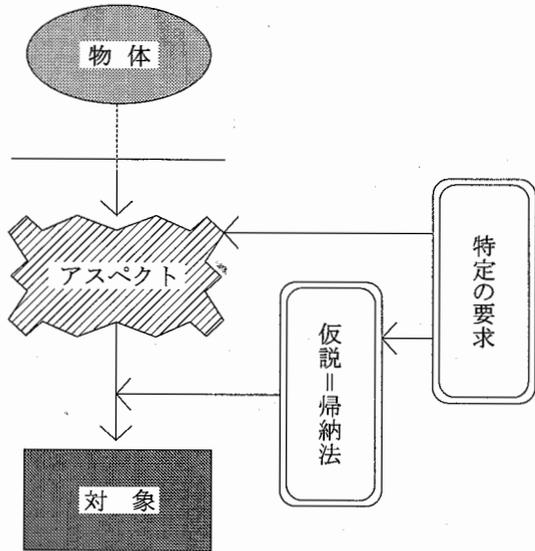


図6

への認識の工程のすべてに関わるものとして取りこむことができるところにある。

さらに、すでに確定したと思われている意味に対してはその攻撃性を遺憾なく発揮するこのモデルは、当然新しい知覚への誘いともなっている。このモデルにしたがって、欲求を変化させれば、わたしやあなたがいま見ているものが、その見え方を急速に変えることになるわけだ。わたしはなにもユートピア的な妄想を語っているわけではない。こうしたアスペクトの転換は、やはりなんと言っても芸術と呼び慣わされる分野で、それをまじまじと見つめる者、それに憑依されてしまう者のうちで、常に起こっていることだと考えられる。人はなぜ、そこに咲いている花を、わざわざ描くのか。しかもその人に独特のスタイル、つまり見え方をともなって？ 答えはいろいろある。しかしひとつ、わたしの立論の流れから言えることがある。花は、明らかに、日常的な欲求の連関という文脈とは異質の場に切り取られ、取り出されたのだ。そうして花は、ひょっとするとまったく予期もしなかったようなアスペクトを、それを見るわたしに与えてくれるかも知れないのだ。繰り返しておくが、芸術が自足的にそういった機能を果たしているわけではない。芸術をそのように使おうという欲求を持つ者にだけ、アスペクトの変容は起きうる。

このモデルは記号論的な閉鎖系での循環論を述べるものよりもいっそう相対主義的に思えるだろう。しかし、知がそもそも絶対的な欲求を掲げただけの、じつは数あるアスペクト生産の一形態にすぎないのであれば、相対主義を非難の標語として用いる謂れもなくなってしまう。このじつに荒っぽい試論でわたしが述べようと試みているのは、アスペクトから意味への工程が、つねになんらかの欲求に結びついた行為であり、したがってその欲求ある程度見極めて変容させることで、新しいアスペクト、新しい記号化、新しい意味の生産、そしてあたらしい知、新しい世界像の形成が可能になる、ということであり、さらには、意味生産に、したがって記号化に必ずしも参入しないかたちでの、単にアスペクトのレベルにとどまるという知覚のしかた、モノの受け入れ方の可能性があるということなのだ。

参考文献

この試論は、わたしのモデルを描き出すことを第一の目的としているために、注が一切ないという、学術論文の慣行には従わないかたちを採っている。それでも、以下に掲げた文献は、このモデルの発想にとって特に重大な影響を与えた。また MIMIS と呼ばれる有志による研究会の場で、工学部助教授望月修氏、理学部教授津田一郎氏、言語文化部助教授伊藤直哉氏、その他いちいち名前は挙げないが、研究会の多くの参加者の方々から、多大な刺激と影響を受けたことをここに記して、感謝の意に代えさせていただきたい。

- アリストテレス：全集第17巻『詩学』（岩波書店）1977。
ダント， A. C.：物語としての歴史（国文社）1989。
グッドマン， N.：世界制作の方法（みすず書房）1987。
Nietzsche, F. Werke in 3 Bdn. Darmstadt 1982. Bes. Bd. 3, S.309-322,
“Über Wahrheit und Lüge im außermoralischen Sinn”
松崎俊之：ニーチェの『道徳以外の意味における真理と虚偽』における言語
と真理。PHILOLOGIE, No.3, p.38-57, 1992。
津田一郎：カオスの脳観（サイエンス社）1990。
Wittgenstein, L.: Werkausgabe in 8 Bdn. Frankfurt a. M. 1984. Bes. Bde.
1, 3, 8.
summary

Some Remarks on Aspects

Jiro ISHIHARA

Production of meanings, normally understood as a procedure of decoding an object in the network of signifiant/signifié, always depends on perception. To be able to perceive an object, as an articulated

something, one must previously know that it can be so articulated; there is a circular relationship between perception and re-cognition. The moment of desire plays therefore a significant role: one believes to have re-found the meaning of a certain object, but the procedure of perceiving this object as an articulated, independent thing is actually only possible, when one desires the very thing to be articulated in such a way, therefore to be a material, which one wants to decode. The way how one finds out and sees an object, which I call a production of an aspect, is a key to understand the procedure of re-cognition and perception, as well as to know that knowledge and science is always relevant to desire.